

第9回建築コンクール

公益社団法人
愛知建築士会 名古屋北支部

つくろう建築

シンポジウム / 受賞作品

製作・発行

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部

<https://www.asa758kita.jp/> <http://kenchiku-concours-758n.org/>

第9回建築コンクール「つくろう建築」 2018年8月発行 300円(税込)

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部主催



INDEX

シンポジウム

シンポジウムはじめのあいさつ	05
江尻憲泰	06
栗生明	10
古谷誠章	11
中村好文	15
伊礼智	17
シンポジウムをふりかえて	19

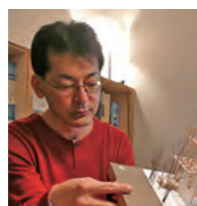
コンクール

最優秀賞	22
優秀賞	23
審査員賞	24
佳作	25
公開審査をふりかえて	25

あとがき	27
------------	----

第9回 建築コンクール シンポジウム

シンポジウムパネラー／審査員



伊礼智 建築家

琉球大学工学部卒業。東京藝術大学美術学部建築科大学院修了。丸谷博男+エーアンドエーを経て、1996年伊礼智設計室設立。2004年「東京町家」を東京の工務店3社と展開。2006年「9坪の家」、2007年「町角の家」でエコビルド賞受賞。著書に「伊礼智の住宅設計作法」(新建新聞社、アース工房)、「伊礼智の住宅設計」(エクスマレッジ)などがある。



中村好文 建築家

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972年穴道建築設計事務所。1975年東京都立品川職業訓練校木工科。1976年吉村順三設計事務所。1981年レミングハウス設立。1987年第1回吉岡賞受賞。1993年第18回吉田五十八賞特別賞受賞。日本大学生産工学部建築工学科教授。

著書に「住宅巡礼」(新潮社)、「普段着の住宅術」(王国社)、「住宅読本」(新潮社)などがある。



栗生明 建築家

早稲田大学大学院理工学部研究科修士課程修了。1973年(株)楨総合計画事務所。1979年(株)都市建築設計事務所Kアトリエ設立。1987年(株)栗生総合計画事務所。1996年日本建築学会賞作品賞受賞。1999年ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋建築デザイン賞受賞。2002年第43回建築業協会賞(BCS賞)受賞。2003年日本芸術院賞受賞。2005年第8回アルカシア建築賞ゴールドメダル受賞。2010年第12回公共建築賞受賞。



古谷誠章 建築家

早稲田大学大学院博士前期課程修了。1994年八木佐千子と共同してNASCA設立。2001年有限会社ナスカー級建築士事務所。1991年第8回吉岡賞受賞。1999年日本建築家協会新人賞受賞。2007年日本建築学会賞作品賞受賞。2007年日本建築家協会賞受賞。2011年日本芸術院賞受賞。早稲田大学教授。著書に「shuffled-古谷誠章の建築ノート」(TOTO出版)「がらんどろ」(王国社)「マドの思想」(彰国社)「建築家っておもしろい」(文屋)などがある。



江尻憲泰 構造家

千葉大学大学院工学研究科修士課程修了。1988年有限会社青木繁研究室。1996年有限会社江尻建築構造設計事務所設立。

2010年日本構造デザイン賞受賞。2013年第14回日本免震構造協会作品賞受賞。

長岡造形大学教授。

シンポジウムはじめのあいさつ

古谷 毎回、進行役を務めております古谷誠章でございます。よろしく申し上げます。今、ご紹介がありましたように、前回に引き続いて今回もぶっつけ本番なんですけれども、それは手を抜いているというよりは、事前に準備したものをもとに討論するよりも、この場の雰囲気新鮮な気持ちでみんなの意見を聞き合えようと、テンションをとっておいたということなんです。

今回のテーマは「つくろう建築」。いつもよくわからないんですけれども、今回はさらにわからない。しかも、ひらがなで書かれているから、いったいどういう漢字をあてがえばよいかもわからない。これは、我々がみんなで相談して決めたテーマなんですけど、考え方によってはけっこう膨らむんじゃないかな、そんなふうにして採用しました。

これから例によって、5人の審査員に一人5枚のスライドを使ってこのテーマをひも解いていただきます。毎回ルール違反はありますが、いちおう5枚ということになっています。これは5人5様の、あくまでも勝手な解釈ですから、みなさんの解釈がそれと違っててもいっこうに差し支えないわけなんですけど、これからみなさんの作品に関して、良いだの悪いだのと言う審査員たちは何を考えていたのか、ということを知る手がかりにさせていただきたいと思います。審査会が待ち遠しいでしょうが、しばらくこのシンポジウムにお付き合いください。



伊礼 みなさんこんにちは伊礼です。とにかく毎回この5枚のスライドを用意するのがとても大変なんです(笑)。特に今回はテーマがけっこう難しく非常に困りました。今日は長丁場ですけれど、みなさんよろしくお願ひいたします。

中村 中村です。よろしくお願ひします。この会が終わった晩に次回のテーマを決めるんですけど、毎回…なぜこんなテーマにしてしまったかな、と自分で自分の首を絞めるようなことになってしまいます。今回も大変なんですけど、少し救いは、公開審査会とシンポジウムが同日開催になったことで、コンクールに対するヒント性がなくていい分、少し気が楽かな?と思っています。

古谷 ところで…。この「つくろう」って誰が言い出したんですって?ですよね…。この二人(中村、栗生)で決めておいて、なんか、さも他の人が決めて大変だみたいなことおっしゃって…(笑)。

中村 まさに自分自身で首を絞めてる(笑)。

古谷 では、もう一人の言い出しっぺ。

栗生 こんにちは栗生です。このコンクールのテーマはね、いろんなことを考えさせるきっかけになるんですね。それで、このテーマが「良かったなあ」というふうには思うのはシンポジウムが終わってからなんです。これから議論しながら、このテーマの良さをみなさんと一緒に作り上げていくんだというふうには私は思っています。

「つくろう」ひらがなで書いてあるということは、いろんな意味に使える、っていうことですよ。大きくは二つあるかなって思っています。ひとつは「みんなでつくろうよ」っていう「つくろう」、もうひとつは糸偏に善の「つくろう」。

それで、このテーマを決めてからいろいろ考えてたら、この二つの「つくろう」はどこか繋がりがあのような気がしてきたんですね。そんな話でも後でみなさんと一緒にできればなと思っています。今日はよろしくお願ひします。

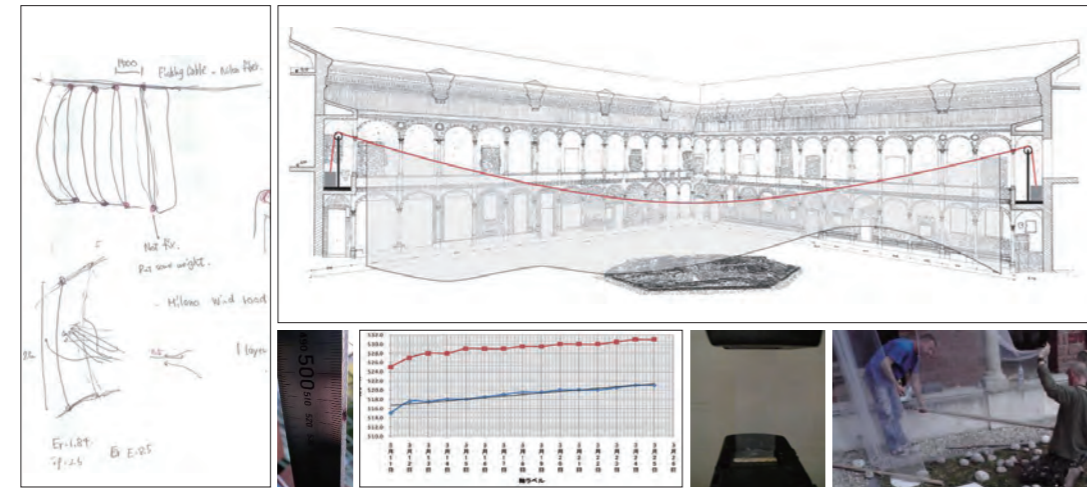
江尻 江尻です。よろしくお願ひいたします。他の4人の先生方と違って私は構造家なので、常日頃、意匠設計者の方を抑えつけてアクロバティックなことをやるのを制限してる方なんですけど、今日はそういうのは関係がないので、私も少し頭を柔らかくできればいいかな、みなさんの作品を見せていただきたがらいろんなことを考えさせてもらえるとうれしいなと思っています。

パネラー01 | 江尻憲泰 構造家

私は「つくろう」について二つ考えました。繕うという意味の「つくろう」ということで、布とか糸とかいうことをイメージしてスライド3枚と、あとみんなで作ろうよと言う意味の「つくろう」をイメージしたスライドを2枚用意させていただきました。

はじめのスライドは、布を相手に構造でどんなことができるかというのをいろいろ試したものです。

これはイタリアで行いました。オーガンジーとかオーガン竿といわれている最軽量の布です。1㎡あたり5gの布を使ってスクリーンを作ろうというので、ダイニーマというカジキを釣るときに使う釣り糸も使っています。クリープしないかどうかなどいろいろ実験しながら、一生懸命計算して進めたんですが、実を言うとあまりにも軽過ぎて風が吹かなくても、普通にこう垂れてたらそのまま浮き上がってしまっ、結局一生懸命やった計算が全部無駄になってしまいました。最終的には飛ばないようにわざわざ重石をつけたという、ちょっと苦い経験のものでした。ただ、すごくきれいなスクリーンになってくれたので、それはよかったんですけど、5gというものは1m位の風が吹いても浮き上がってしまう。ぶら下がった時に重みで切れないか心配だったので強度試験をしたんですけど、全くそんなことを心配する必要がないものでした。



次のスライドは、これも布を相手にしたんですけど、これこそ繕いながらつくっている。三軸織といって普通は縦横ということで布を織るのですが、これは写真では分かりにくいんですが、三方向に布が織られていてですね、その三方向に織られているものを一部こやって切って、少し膨らませてあげて、そうすると折板構造のような架構ができます。ただ、連続させたものは不可能なのでワンユニットごとにもたせるというふうにしたんです。これは中国の上海で作ったものです。本当は全部構造で成立させたかったのですが、こういうフレームを組んで、そこにワンユニットずつはめ込んでいって成立させようということを試みたものですね。これも透けて見えて本当は骨組なしでもっときちんとした架構を組みたかったのですが、ちょっとそこまでは至りませんでした。しかし、一応布を構造として使えるようにはなったかなと思っています。



次のスライドは、炭素繊維でできたロープを使っていろいろな試みをやっているところです。石川県にある小松精練という繊維メーカーの、その製品をなんとか構造で使ってほしいと言う要望があり、隈研吾さんが設計をやっていたんですね。私は、はじめ関与していなかったのですが、ある設計者から、「実現できない」だろうから説得をしてくれと言われて、それで説得をしに行ったら自分でやることになっちゃったものなんです。(笑)

最初のイメージが布をこやって被せるイメージで、建物に布を被せて補強したいということでしたので、炭素繊維のロッドをこやう風にして細くして引っ張り合えば、それで構造的に効くだろう、というふうにして提案した結果できたものです。ただ残念なことに日本の建築の基準の中ではこういうことは認められていないので、実は耐震補強をやった上でさらにプラスαになっています。内部もこやって編んだ状態にしたいということで炭素繊維を格子状に組んで、ご覧の部分も布をかぶせたようにするために繊維を貼り付けています。炭素繊維は腐らないので土の中にそのまま埋めて、今はもう3年目になります。元プロレスラーの馳浩さんが来た時に、これをロープがわりに遊んでたという話を聞きました。プロレスラーがぶつかっても切れなかったので安心しました。



こちらは同じ時期にずっとやっていたのですが、これも両方とも隈さんのデザインです。東京タワーの上にインсталレーションをやったんですけど、これまたちょっと難題を言われまして、このロープを自立させろって言うんで、これも一生懸命やりました。あと、床をロープで作れって話がありまして、うまくいかなくて結局 60cm くらいしか人が歩けなかったんですけど、ロープでこ

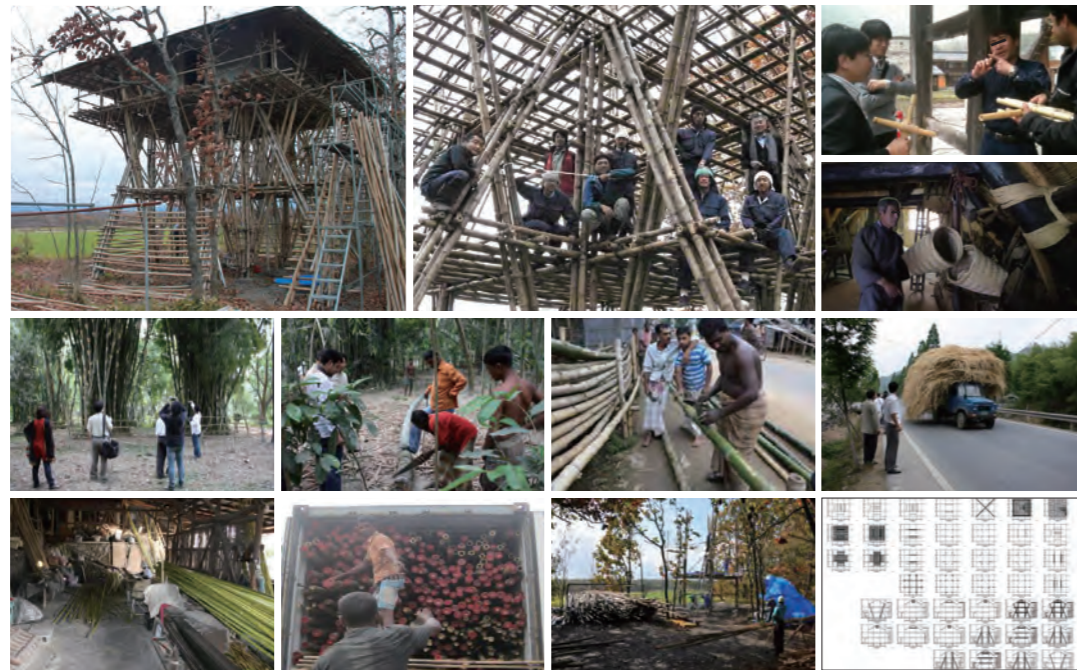


ういうふうにして編み込みながら立て掛けていったものを作りました。インディアンの小屋みたいにしてこやして上で留めてあげて何とか自立しているというものです。日本では、ほとんど例がないのですが、ヨーロッパですと炭素繊維のロープを使ってモニュメントを



編み込んで大きなモニュメントを作ったりしています。調べるとたくさんインスタレーションが作られています。この材料は橋梁で使われている材料で、鉄の8倍の強度がありますが、重さは80分の1くらいです。軽くてすごい強度がありますので、これが建築に使えるとなると建築が様変わりするのではないかと思います。

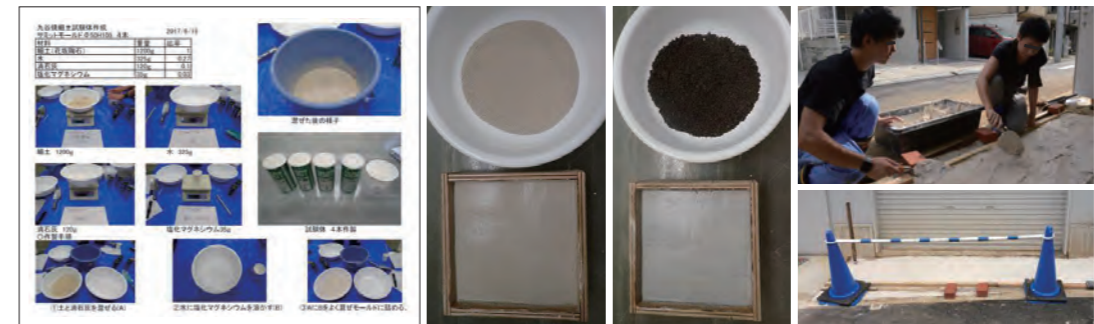
次のスライド。これは以前「闇の建築」の時にも使わせていただいたんですけども、みんなで「作ろう」ということで、ものすごい苦労したプロジェクトです。竹で建築物を作るにあたって、竹を結ぶのには木を結ぶ方法を熟知している人に聞いたほうがいだろうというので、まずは白川郷に行って結び方を教わりました。その後に竹で有名な大分に行きます。そこでは竹の性質について話を聞いたりしました。それでこの後今度は、竹の構造がいっぱいあるということで上海に行って竹のことを調べて、あとはバングラデシュまで行って竹の構造を視察しました。いろいろとやっているうちにバングラディッシュのプロジェクトになって進めています。バングラディッシュは洪水が起こると国土の3分の1が水没してしまうので、3階建てを提案しようとしています。バングラデシュで竹を購入してコンテナに積み込んで、北海道まで運んで作りました。学生だとか私の事務所の所員だとか、あと庭師の方に頼んで、実際にはこの人数ではなくて、延べにすると50人ぐらいの人がとっかえひっかえ入って、すごい大変な思いをして作りました。今も北海道に立っているんですけども、バングラデシュの風景と北海道の風景が似ていて驚きました。



最後のスライドです。これは私の事務所です。一応鉄骨造なんですけれども、床を木にして鉄骨と木の混構造です。実はこれです。地鎮祭をしてから実際に荷物を運び込むまで3ヶ月で全部作ったんですね。あまり良いデザインでないので大きくクローズアップできていないのですが、これも骨組みだけは工務店さんに頼んで後は手作りでいろいろ手を加えています。旭化成建材さんがネオマフォームを非常に低価格で提供してくださっています。貼り方も教えてくれて、それを私の事務所に来ている若いアルバイトの大学生の子たちが、みんなで貼り付けてくれました。今は断熱材が見える状態になっています。



下の写真は、九谷焼のプロジェクトでもらってきた大量の砂状の粘土で、版築とか三和土ができないかと思って、高田馬場の土で混ぜたり、砂をホームセンターで買ってきて混ぜたりして強度の確認をして、事務所の自転車置き場のところでいろいろ調合を検討して確かめました。ちなみに、これは畑に巻く消石灰と豆腐に使うにがりを使ってそれで作っています。作ろうと思ったきっかけは、清水寺の斜面のところが同じ方法でつくられていて強度の確認をしたらコンクリートの3分の1ほどの強度があったので、これだったら使えるなということでみんなで作りました。



この右の写真、これは事務所の制震装置です。ここにすべり支承をつけているんですが、その上手作りで本棚を作って、事務所です。やった案件や、いろんな方とやった構造計算書その他の書類を全部乗せて、それがおもりになって地震の力を軽減するというものです。30%位軽減するのかな、全部手づくりで作りました。長岡から学生を連れてきて作業したのですが何人も逃げ出してしまって、これもすごい大変な思いをして作りました。

あとこれ、最後なんですけれども、いろんな木を最近いっぱい使うようになって、しょっちゅう実験をやっているんですね。木といってもその土地その土地で性質が全く違うのでその都度試験をしているんですけども、それが何回も何回もいろんなところでやっているのでもちょっと大変だなと言うことで事務所の中に試験装置を作っています。



機械の部分から全部私が設計をしています。まだ作っている途中で完成していないので、今日もここに来ていなければ、おそらくこれをつくっていたと思います。床を木にしているのいろいろなものを取り付けられるんですね。2年目になるんですけども、こうやって手作りをしながら仕事をしています。事務所が暇になった時にちょこちょこやりながらなので、まだまだ未完の事務所という感じです。

パネラー02 | 栗生明 建築家

繕いの文化 「つくろう」には、大ききは二つあるかなと思います。いま、江尻さんが言われていた「みんなで作る」という意味と、「傷んだところを繕って再生させる」という意味、両方があると思います。「繕い」っていう言葉を先ほども言いましたけれども、これは日本の固有の文化と考えてもいいのかなと思っています。今日は建築のスライドはありませんが、その「繕い」ということ、そのものに美学があるんじゃないかな、というふうに思っ

て持ってきたスライドです。一つ目のスライドです。この茶碗、お茶をやってる方はご存知だと思うんですけども、唐津の高麗の茶碗です。江戸時代に割れたところを金で継いでいるんですね。そのあとに、また欠けたところを今度は銀で継いで、しかも茶渋がついています。

お茶の世界では、この茶碗は作者は誰で、誰が持って、どういうお茶会があった、そのときのテーマは何で、どういう出席者がいたか、ということがずっと記録に残っています。そして、道具は長いものになると何百年と使い続けます。唯一無二のものなんですね。実際見てみると、確かにこう古びてそれなりの風格が出てきてる。金継ぎや銀継ぎ、あるいは茶渋がついたり、と歴史が現れているんですね。そういう、時間の流れそのものを愛でるといふか、それをひとつの景色として見ていく文化って、なかなかないんじゃないかなと思うんです。割れたものを継ぐときに、「共直し」っていう、接ぎ目がわからぬように継ぐことはよくありますが、これは金だっ



たり銀で継ぐわけですから、逆に継ぎ目ははっきりと見えてくる。それ自身をひとつの景色として愛でていく、という文化というのは、なかなか得難いなあとと思います。それと、ここのお盆の割れているところを「チキリ」でつなぐことで、これ自身もひとつの意匠として考えているんですね。あるいは、障子の破れたところなんかを銀杏の葉っぱで貼ったり、桜の花びらで貼ったり、傷ついたところを修復してプラスに転じていく、そしてある種の創造性を発揮していく、っていう文化というのはなかなかおもしろいものではないか、大切にすべきものではないかな、というふうに思います。

建築でもそういうことはあると思うんですね。傷んだところを単に修復するのではなくて、修復しながら新しいイメージを引き立てていく。そういうものの一つの例として、今日は、茶碗の事例ばかりですが持ってきました。

二つ目のスライド。これは、「呼び継ぎ」っていう継ぎ方ですけれども。志野の茶碗ですけれども、欠けたところを同じ釜の破片を持ってきて繋いでいます。継ぎ目の金が非常に印象的で、もうひとつの景色として愛でていく、ということですね。

三つ目はこれなんか、金で継ぎながらですね、青海波という古くからある文様を取り込んでいます。新しい景色をつくりだして銘も変えていく。欠けたものをそのまま捨てるんじゃなくて、それにあう意匠として継いで、茶碗としての機能を再生しながらも見え方が変わってくる。景色が変わってくる。という例です。

これは徳利の口のところがかけたんですね。それで、修復しているんですけども、この金のところ、写真ではちょっとわかりづらいんですが竹と松を描いているんですね。それで徳利の胴体の方は梅ですから、松竹梅ってことで、おめでたい徳利に作り替えているんですね。



これなんか明らかに継いでいるのがわかりますよね。細川家に伝わる呼統です。まるっきり違ったものを繋ぎ合わせて器として使っていく。そして、これを愛でていく。「おもしろいでしょ」っていうものですね。多分、建築でもこういうことって十分考えられるんじゃないだろうか、傷んだところ、あるいは壊れたところを直しつつ、機能としては歪みながら、意匠が変わっていく。それで、これによってまた価値が上がってくる。



最後のスライドです。これは三種類の破片を集めてるんですね。こっち側が織部で、これが鳴海織部、それでここに黄瀬戸が入り込んでくる。こうなると、もう完全に新しい創造ですよ。向付（むこうづけ）という機能をちゃんと残しながら、まるっきり新しい意匠として創り上げている。3種類、あるいは4種類、場合によっては5種類、6種類と、多様なものを集めつつ、一つの器として使い続ける。そういう文化というのは日本が誇れる文化のひとつではないかなと思います。

今日は、これで以上です。

パネラー03 | 古谷誠章 建築家

金継ぎは出てくると思っていたので、私はそれを建築でやるというものかな、というのを持ってきました。

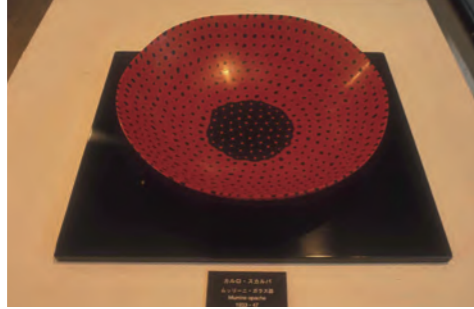
去年もスカルパの話をしていたので躊躇したんですけども、今回のテーマ「つくろう」はスカルパの真骨頂かなと思って、これを選んできました。右の写真は、シチリアのパレルモにあるパラッツォ・アバテッリス (Palazzo Abatellis) という美術館です。パラッツォ・アバテッリスっていう名前がついているぐらいですから元々は宮殿なんですけれども、それが今はシチリア州立美術館になっています。



シチリア島は第二次大戦中に米軍の空爆にあっているんで、この建物そのものは、ほとんど瓦礫と化していました。それをもう一度建て直して、スカルパが改修したというものです。よく調べてみたら、建物はスカルパが呼ばれる前に復元して再構築されていて、最後の仕上げの段階でスカルパがはるばる北イタリアから呼ばれたんですね。私はスカルパが断片化した瓦礫のパラッツォ・アバテッリスを見たら、これを考えたとしたらすごいなと思っていたんですけど、まあ実際はそうではなかったんですね。ただ、その断片っていう言葉はものすごく重要なキーワードで、歴史家のセルジオ・ボラーノが「シチリアン・フラグメンツ」(シチリアの断片) という論文にまとめています。

建物のほうはこれは修復された中庭なんですけれども、窓や出入口、階段といった建築的要素と、ベンチのように見える考古学の展示物や、壁に埋め込まれたレリーフ、オブジェなどが同じマナーでそこに陳列されていて、まったく等価に扱われている。見ていると、どこが建築でどこが展示品なのかよくわからないんです。その境目がないんですね。さきほどの栗生さんの説明を借りれば「呼び継ぎ」と言うんでしょう。スカルパは断片から触発されて、その断片どうしを呼び集めて継ぎ合わせることで、それぞれが融合したまったく新しい空間をつくり出しています。

これは1954年にできた、スカルパの長いキャリアの中でわりあい初期に実現した作品のひとつです。去年ご紹介したカステルヴェッキオは1964年ですから、それよりちょうど10年前にこれが出来ているんですけど、スカルパを考えると、このように断片を組み合わせて、あいだをこういうふうに塗りこめて繋ぎ合わせていくっていうのは、スカルパの手法の原点になったのではないかなと思っています。



それで、なんでスカルパはこんなことを思いつけたのかっていうと、次の写真はスカルパがデザインしたガラス器です。スカルパは、建築の正規の学校を出ていなかったから、30代の頃は建築家資格がもらえてなくて、親方のところで修業しているような状態でした。ですから30代は不遇な時期を過ごしています。

ベネツィアン・グラスで有名なムラーノ島に滞在して他に仕事がないからと、せっせとガラス職人のためのデザイン画を描いていました。そして、大変多くのデザインを残しています。これはそのうちのひとつのものなんですけど、瀬戸物みたいに見えますがガラスなんです。

これは、赤いガラスと、黒いガラスを組み合わせてつくられています。象嵌（ぞうがん）してつくられているんですけど、温度の高い状態じゃないとこういう加工はできないわけです。で、その温度の高い状態のときに象嵌して、そしてさらに磨いて、っていうことをしなとできない芸当なんです。30代の若いスカルパはこんなもののデザイン画をたくさん描いて、こんなふうにはできないのか、あんなふうにはできないのか、すごく独創的で新しいことをいっぱいやろうとするわけですけど、まわりの老練なるガラス職人たちは、はじめは納得しなかったらと思う。作ってくれるようになるに至るまでには相当な確執があったらと思う。「おまえ、そんなことを言ってもこんなものできるわけがないだろう」みたいなことを散々言われたはず。でもそれを実現できるように考える。実現できるデザインを考えるためには相当スカルパ自身がそのマテリアルに対して深い知識を、あるいはその加工技術に対して意識を持たないと、こういうデザインはできてこないと思います。

これは、スカルパがその物の物性を知り、それを加工してひとつのカチあるものにするために、どういう手順を踏んで、どういうテクニックが必要か、というのを30代の頃の不遇なムラーノ島生活で、有り余るほど経験したからなんです。そういう物性を活かしたデザインを考えたスカルパだからこそ、いろいろなものを継ぎ合せたり、何かに断片を加えたり、ありあわせのように見えるものをそこに埋め込んで一体化していくという手法が培われたのかな、と思います。

これは、今日のお題でいうと「繕う」です。パラッツォ・アパテリスは完全に「繕う建築」なんです。でも、新しいものを創りだす方の「創ろう建築」には何が必要かっていうのも、なんかこうわかってるんじゃないかなと思って取り上げました。



次にいきます。これはですね去年、小豆島で瀬戸内芸術祭に参加した作品です。堀越という地区があるんですね。40くらいしかない、のどかな入り江に面した集落なんですけど、ここには4組の移住者が来て、空き家に引っ越してきて暮らしているんだけど、その新しく入った4組の移住者と地元のお年寄りたちがとても仲良く暮らしている。それで、ここは空き家事業のなかで成功している集落だと思われるので是非ここを卒論で調査したいと、うちの女子学生が言い出して、その彼女がここに入りこんで調査した集落です。歯抜けのようになった空き家が目立つ高齢者ばかりだったところに4組の移住者が来て、そのうち2組が新たにここにきてお子さんが産まれたりしてるから、小さなお子さんたちがいる家族と高齢者世帯が混ざり合って暮らしている。そういう場所でした。卒論がとて力作だったために小豆島町長がすごく感激して、こんな卒論生を育てた先生の顔が見てみたいと、私のところまでやって来られまして、今後の小豆島のためにはあるんだけど、とりあえずこの集落をきっかけとして早稲田の学生たちで何か力になってもらえないか、ということでお付き合いが始まりました。



実はここは、有名な「二十四の瞳」を書いた壺井栄さんのご主人、壺井繁治さんの生家がある集落で、その生家の前には、今はもう使われていないんですが、小さな分教場と先生のための教員宿舎があるんです。まあ、まさに壺井栄さんが分教場の小説を書く構想の原点になったような場所なんです。でも、今は超高齢化していて人口減少によるいろんな問題を抱えている集落であります。

で、何の話をしているかという、この集落では、古くからの人と新しい人とがうまく融合して暮らしているんですね。さっきのスカルパの古いものと新しいものが混然一体となってできている、ということとか共通性がある、と思ったんです。それはどういうことかという、どっちかがどっちかに一方的に奉仕している関係ではなくて、お互いに助け合っている関係なんです。

古くからの集落の人たちにとってみれば、若い人たちが来るってことだけでも活気づくことではあるんですけど、その移住者たちには、働き口などを世話することで定着して定住してもらうようにしたんです。

そしたら定住した人たちは今度何をしたかという、もう今は行われなくなった地元の納涼祭なんですけど、そのお祭りを「私たちにやらせていただけないでしょうか」と言って若い人たちが復活させたんです。田舎のちっちゃな納涼祭なのに、出てくる料理はニョッキだとかすごいハイカラなものが、地元食材を使って作られていたりする。このような相互に補完し合う関係がこの集落にはあるんですね。

そこへさらに異物である僕たちが混ざり込んで、そしてそこで僕たちは何をしてあげられるだろうと考えました。聞くところによると、昔はそれほどなかった猪が最近はやたらこの辺に住み着いていて、せっかく作った畑の作物を食べられてしまっすぎて困っていると。小豆島っていうのは昔から猪狩りの文化があるんですけど、この地域には無かったんですね。それじゃ猪除けを作ろうじゃないかということになって、ここに生えていた孟宗竹を使って、猪フェンスを猪垣（ししがき）を作って、これでもって瀬戸内の芸術祭にアート作品として参加しようということになりました。それで、当日はのぼり旗を作ってこの浜辺の道にこれを並べて、ここに上がってきてもうなふうになりました。そこにあるもので、そこに新しく来た人たちと、高齢者の人たちと、自分たちも一緒になってつくり上げた猪垣であります。

そういう人口減少、高齢化に悩んでいる地域って結構たくさんありますよね。私たちは最近そういうのを頼まれることが多いんですけど、次のスライドが一番最近依頼された事例です。

今は岐阜県美濃加茂市になっていますが、旧伊深村の昔の村役場です。この村役場は今はほとんど何も使っていないんですけど、それを住民が交流できるカフェにしたいということで、再生していく為のアイデアをつくってもらいたいといわれて出かけて行きました。

まあ、研究室の若い学生たちがいるとそれだけでも大変大歓迎を受けるんですけど、ここの方たちは行くに必ず何かご馳走して下さるんですね。地域の食材で作られたもので、これ七夕の日に何ったから星のマークの付いた大変気の利いたものなんですけど、こうやってすぐもてなしてくれるんです。

それで、ふと考えついたんですけど、人が日ごろ作るものなかで、ご飯というものは最も身近にみんなが作られて、手作りができて、そしてそれによってこんな風に人を照らすことができる、人と人をつなぐことができる。人と人を結び合わせるという意味で、人間関係を繕う事ができる。これは何かこれもひとつの「つくり建築」なんじゃないかと思ひ始めまして今日はこの写真を持ってきました。



次はですね、三陸の田野畑村（たのはたむら）なんですけれども、2011年の3.11の時に津波で大きな被害を受けた三陸鉄道の島越（しまのこし）という駅があった場所です。駅ごと橋脚ごと押し流されてしまった場所ですね。災害があつてこういうふうに物が壊されちゃった時っていうのは、逆に言えば最も何かをつくり出さなくてはいけない、もう一度作り直さないとはいけない、すごく重要な機会なんだと思います。先ほど栗生さんがおっしゃってた金継ぎにしても割れたり壊れたりしたことがきっかけとなって新しいものに生まれ変わって行くわけなんです。スカルパ設計のパラッツォ・アパテッリスも、瓦礫と化していたところから、それをつくり直そうと思った時に新しいものが生まれ出た。悲惨なことではあるけど、そういう事実が起こったときに、それをすごく前向きに考えて、新しいものに作り直すんだっていうふう立ち上がれば、さらに新しいものを生み出す原動力になりうるんじゃないかと思いました。

「繕う建築」が生まれる背景には、何らかの理由で壊されてしまった、あるいは壊れてしまった、ということが必要なかもしれないと思って写真を持ってきました。

右の写真は、復興公営住宅をどうやって作ったら良いかということと相談にあずかったのでプランをしたものです。南部地方ですから曲り家みたいにL型にして、前庭で毎日のように顔を合せられるようにしました。

右下の写真は曲り家の曲がっている所からの景色です。津波による被害を受けたんだけど、地域の住民にとっては恵みの海なんです。ですから、その恵みの海の景色が見えるという写真です。新しい生活をつくり変える出発点になってくれたらいいなというふうに思っています。



次のスライド、これも実は震災と関係しています。こちらは田野畑と違って非常に多くの犠牲が出てしまった東松島の周辺なんですけれども、東松島市は全員が高台に新しい街を作って移り住みます。学校もみんな新しく生まれ変わってしまうんですけど、その背後にある豊かな森を何とか活かして、森自体を学校の教室だと言える様なものにしようと、C.W. ニコルさんが進言して、「古谷さん、ちょっと建築的なところを手伝って欲しい」と言われて、手伝いに行き作ったものです。地元の人たちと学生たちが共同作業で作り出したもので、最初に被災した低地を全部見下ろせるようなかたち、こういう馬蹄形をした建築です。これは、2番目に作った森の中の風や虫や鳥の声を聞くことができるシェルター。テントで全部すっぽり覆いますと、音が集まって聞こえるんですが、そういうシェルターをつくって、そこに子供からお年寄りまで世代を超えて一緒に座り込んで、集落は昔こうだった、東松島はこうだったというような話を、目の前の情景を見ながら、聞いたり聞かせたりすることができるような場所になって、教室の一部になるということです。

これは、釘とか金物を一切使わず、木ダボと竹クギだけで作られたシェルターです。全部手作りです。

パネラー04 | 中村好文 建築家

「繕う」美学 栗生さんとかなり似たスライド選びになっていますが、もう少し日常的なもので選んできました。今回の五つのスライドのテーマは、「陶器を繕う」これは金継ぎとかそういうものです。「椅子を繕う」これは木のウィンザーチェアを繕っているものです。「やかんを繕う」これは金属ですね。「衣服を繕う」これは布。そして最後に、「建築を繕う」ということで割合手元にあるものから集めてきました。

これはデルフトの白磁のお皿です。金継ぎは日本でしています。もとは16世紀か17世紀、1600年から1650年頃のものなんです。こういうものがオランダの民家の、地下室の泥の中に浸かっているらしいんですが、そこを発掘していくとお皿だとかそういうものが出てくるんだそうです。それを道具屋さんが買って日本に持ってきて、きれいに繕うわけ。たぶんオランダの人たちのあいだではこの白のお皿と言うのは割と庶民的なお皿で、デルフトの上流階級の人たちは藍色のような青を好んでいたわけで、それが無いという事は庶民のものなんだろうね、それを繕っているんです。



これがただの白のお皿だとおそらくそんなに魅力はないと思います。金で繕ったこの形がとても絵画的で魅力があって、お皿の価値が数倍にもなっているんじゃないかなと思う。これがもし完璧なものだったらたぶん買わなかったと思います。金繕いというものが持つ一種の絵画的な魅力ですね。栗生さんの話にもありましたが、金繕いの最もシンプルな美しさが表れていると思います。



次は僕が20代の終わり頃に買ったウィンザーチェアですけれども、もともと似たような色の木であちこち継ぎが当ててあったんですね。ウィンザーチェアは石の床で使っていたものが多くて脚も悪くなったりするけれども、結構直しながら長く使うんですね。座面なんかよく見ていくとこだけじゃなく、こら辺にも傷があったりして、それを上手に埋めて、繕いながら長く使っていくわけ。たぶんこれは1800年代終わり位の1870年か1880年位のウィンザーチェアです。

右の写真、これは僕自身が繕ったんですけども、割れて開いてしまったところを埋木して、金物を入れて継いだんです。壊れたからといってすぐ捨てるのではなく、こういうふう繕いながら使っていくというのは大事な事なんじゃないかなと思います。これは建築についてもいえることで、ちょっと悪くなったら壊してしまおう、新築しよう、というんじゃなくて、繕い方を工夫して寿命を延ばして使い続けていく、歴史を繋いでいく、ということも大事な事ではないかなと思います。

これは僕が18歳か19歳の時に買ったやかんです。今僕が69歳ですから50年使っていることになります。これはドイツ製の笛吹ケトルなんですけれども、底が厚い銅板でできていて沸くのがものすごく早く便利なんです。ただ、この取っ手がベークライトでできているので、コンロで沸かすとこがどうしても焼け焦げてきて、だんだんとひどい状態に焦げてきていたんですね、黒くなってしまっ。ここが壊れてしまうと結局やかんとしては捨てるしかないなと思っていたものですから、友人に頼んで銅板を叩き出して、この形にしてみると、ガードしてもらったんです。それで一安心だと思って使っていたんですけども、今度はちょっとした不注意で流し台から転げ落としてしまっ。そしたらやっぱり全体がもろくなって、この取っ手が取れてしまっ。いよいよダメかなと思ったんですが、



これを一度直してくれた工作名人に相談したら、何とかなるかもしれないよ、と言って直してくれたんですね。カスタムナイフを作る素材ですね、マイカルタという樹脂に繊維質のものが染み込ませてあるような素材で、削り出してこの形に作り直してくれたんですね。ですからたぶんあと50年はまた使えるんじゃないかと思います。1つのやかんでも100年持たそうと思えば、ちゃんと使い続けることができるという金属の繕いの例です。



次は、シェーカー教徒のものです。アメリカのシェーカー教徒は、衣・食・住をすごく大事にしていた人たちで、これは衣服の例ですね。前に使っていた人が亡くなったりして使わなくなってしまうと、その服を次の人が譲り受けて使います。これは、たぶん前の人が体が大きい人で、もらった人が体が小さかったんでしょね、袖の丈を上げたり、穴が開いたところを繕ったりしてあります。面白いと思うのは、継ぎを当てたついでにポケットにしてあったりします。どうせ継ぎを当てるんだからポケットにしてしまおうという発想ですね。シェーカー教徒らしくて面白いなと思いました。衣服もまた、こういう風にして繕いながら

使い続けて、そして繕った形が次の魅力を生み出すというのが面白いなと思いました。

ちょっと余談ですが、青木淳さんが設計した青森県立美術館では、職員のユニフォームが古くなった時に、そのユニフォームをデザインした皆川明さんに、新しくしたいんですと相談をしたんだそうです。そうしたら皆川さんが、いやそうではなくてその傷んだものを送り返してくださいと、それに僕が継ぎを当てますと、そして継ぎが重なっていったら面白いんじゃないですか、違う魅力が出てくるんじゃないですか、というふうに言ったということです。津軽地方では農作業の服なんかは継ぎを当てながら使っていて、そういう青森地方の伝統とも繋がるし、傷んだから捨てて新しい形にしようということではなくて、継ぎを当てて新しい形を作っていくましようといった逸話があるんですけども、そのことなんかもこのシェーカー教徒の服を見ていると思ひ出します。

最後はこれは建築ですけども、建築で「繕う」というと、どういうことになるかなということ、先ほど古谷さんからスカルパの話でまとめてもらいましたが、建築を繕うということは、建築を改修するということに相通するものじゃないかと思います。この建物は金沢ですが、金沢市というのは伝統工芸が盛んですけれども、同時に現代の工芸（生活工芸と言ってもいいかもしれません）もちゃんとしていこう、推進していこう、という動きがあって、それで、辻和美さんという金沢在住のガラスの作家をディレクターにして生活工芸を盛り立てていこうという動きが5年ほど前から始まっていたんですね。それで、活動の拠点になる場所というがギャラリーですね、そういうものがあつたらいいねということになり、金沢市がこの古い建物を借りて、そして改修してギャラリーにしようということになったんです。

そんな経緯があって、辻さんから僕に改修の話が来たので見に行ったんですけども、何しろ来月の何日までにオープンしないといけないという話で、もうすでに1ヵ月切っているような話で、それで出かけて行って、もう事務所に持ち帰ってデザインする時間がないのでこの場所に付きっきりでデザインしたものです。建物を全く新しいものにしてしまうと街並みが壊れてしまうので、何かある種のトーンというかな、少なくとも色とか素材感だとかそういうものは合わせつつ、新しい感じが出るようにしたいなと思って、これを見たときにすぐ、これはもうガラスと鉄で、特に鉄は錆びたものでいこうと発想して、改修しました。今日は中をお見せする時間はないのでファサードだけ見せてもらいます。もちろん中も変えていますけれども、出来上がってみると街の中で特別な感じもなくて、まあまあこういう改修の仕方も一種の建築を繕うことになるのかなと思いました。



パネラー05 | 伊礼智 建築家

僕は今回は庶民的なものでまとめてきました。「つくろう」ってことは、繕い続けるということ、延々繕い続けてより良くしていくってことなんじゃないかなと思ひまして、いろいろと資料を集めてきました。

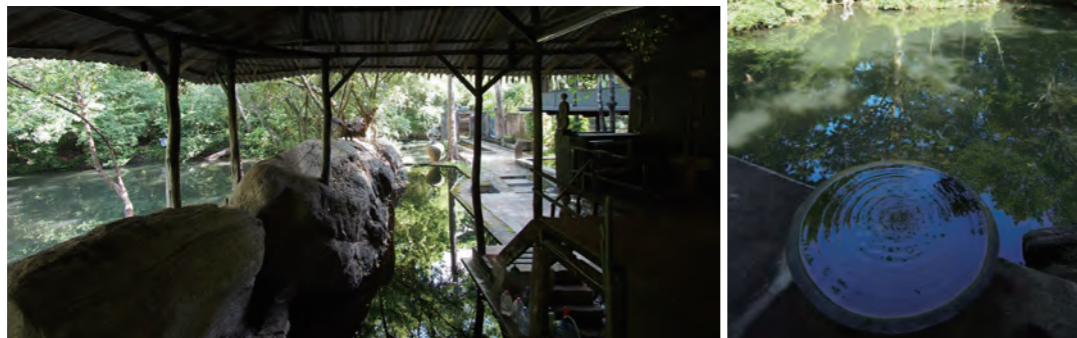
最初は「道具を繕う」です。これはラオスです。僕は東南アジアが好きなんです。何故かというは僕は沖縄の出身で、子どもの頃の感じとか、周りの大人たちの雰囲気すごく近いものがある、とても懐かしいんですね。ちょっとした物は全部作っちゃうし、ゆいまるで家を作ったり、無いものはあり合わせのもので何でも作ってしまう。僕も子どもの頃は手伝ってブロック塀作ったり、屋根の雨漏れを直したりしてたんです。そんな観点から見ると、タライで作ったねこ車なんかすごいですね。このサイドカーみたいなものとかも多分だん普通にやっつてることだと思ひます。とにかく本当に必要なものはどんどん作る。そういう文化が一般人の人達の中に残っているのことが、とても凄いなあと思ひます。



次のスライド（下の写真）は船です。いろいろなものを組み合わせて、そこにベニヤみたいなものを敷いて、車なんかも運んでしまう。来年ラオス行こうと思ひてんですけど、そういうのが多分ラオスとかミャンマーには、まだまだ残ってるんじゃないかなと思ひます。

二番目は「自然を繕う」というテーマです。これはジェフリー・バワの「ヘリタンス・カンダラマ」というホテルですけど、僕は普段一緒に仕事している仲間が荻野寿也さんという造園家がいるんですけど、彼はいつも「自分の仕事は宅地になったものを元の自然に戻すこと」って言われてるんですね。これって、バワの建築って全くそうなんです。『熱帯建築家』ってタイトルで山口由美さんがバワの建築のガイダンス本みたいなものを一般向けに出してますけど、その冒頭で隈研吾さんがバワ論を書いているんですけど、隈さんから見たバワっていうのは、「建築の時代だった20世紀をおち壊して庭の時代にしたのはバワなんだ。ただし、バワの建築はゴミみたいなもんだ。」というようなことを書いていますけれど、本当にバワの建築は全貌がよく見えないんですね。みんなこうやって自然に溶け込んで。人間が人工で造った建築を、自然で繕っていくというのがバワの魅力なのかなあと思ひます。





三番目は、これもその続きで「ラキ・アトリエ」です。パワと一緒にランドスケープをやっているアーティストなんですけれど、名前をラキ・セナナヤケといいます。これは、その人のアトリエです。もとからこうあるのではなく、池を造ったりして彼は自然を造り込んでいます。その中にアトリエを作って寝泊まりしながら作品をつくっているんですね。普段から上半身裸で、結構いいおじいちゃんなんですけど、不思議な人でおもしろい方でした。

次のスライドは、その庭ですけれど、池があって見たことのないような魚が泳いでいたり、奥のほうには彼の作品がいくつかあります。パワと一緒に二十数年かけてやった「ルヌガンガ」っていうパワの邸宅にも、いきなりジャガーの置物があったり、いろいろな作品があるんですけれど、完全に自然に戻すのではなく、できるだけ自然に戻して、その自然の中に自分の作品が置いてある。不思議な感覚を覚えました。



四番目、これは僕のなんですけれど、この真ん中の白い建物が僕が設計した住宅です。場所は京都のすごく景観の良いところです。この右手側が南で本当は日当たり考えるとそこに大きな開口をつけたかったんですが、分譲地の計画があるということで、思いっきり反対側に開いています。建物が出来上がったとたん分譲地の工事が始まって、一般的な分譲住宅がたくさん建っちゃたんです。ああ京都でもそういう感じなんだと少し残念に思ってたんですけど、このあいだ行って来たら横に分譲住宅が2軒建ってたんですね。それがすごく僕の設計した住宅に気を遣った感じがあって、佇まいを繕ってくれていました。どこの工務店なのかという設計者なのか知らないんですけど、庇の薄さとか結構真似てたり素材の使い

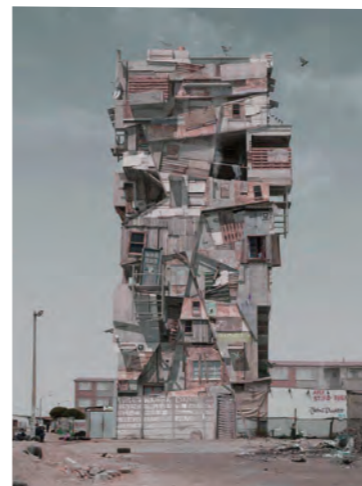
方に気を遣ってあったり、とても感じが良くて、佇まいは伝染するんだなあと感じました。私は普段の設計からそうやって周りに気を遣いながらやっているんですけれども、知らない方があやってくれているのはとてもありがたいことだなと思いました。

五番目、これはマニラに行ったときのものなんですけれども、空港からバスでホテルへ向かうときにチラッとこの風景が見えたんです。僕はバラックが好きなので興味を持ったんですが、ガイドさんからは「絶対行くな。マニラにはそういうところがいっぱいあるけど絶対近づいたらいけない。」と念を押されました。でも行きたくてしょうがなかったんですね。ここは地図から探して行ってきましたけれど、とても怖かったです。

次の写真は、この中に入っていたものです。あり合わせの物で自分たちで作っているんですけれど、その建築が良く出来ているんです。立体的にもね。コミュニティもしっかり出来ていて、



ルールがあるみたいで、道の反対側が台所で、それぞれそこでご飯作っているんですね。ここでは公営住宅の計画があるようで、何年後には強制撤去されて、新しい住宅に移転するというようなことでした。絶対こちらのほうがおもしろそうだなと僕は思ったんですけど、たぶん今はもう取り壊されているとは思いますが、したたかさというか、生活の臭いが凄くて、力強さを感じるような住まい方を見せていただきました。



それで、これが最後です。これはフィリピンではないんですけれども、そんなバラックを縦に積んだようなものですね。僕は下町に住んでまして、下町を散歩するところという感じの、あり合わせのものであちこちを繕ったようなものがあります。これなんかはもうアートで、実際どうやって暮らしてるんだろうかって思うんですけど、もしかしたら建築家のオブジェ的なものなのかもしれないですね。

今日見ていただいたものは、凄く生活力があるというか、パワーがあふれていて、繕うこと、繕い続けていくことで創造性みたいなものに繋がっているんじゃないかなと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

シンポジウムをふりかえって

栗生 とても面白いプレゼンテーションだったと思います。

「つくろう建築」というと、すぐスカルパを思い浮かべたんですね。スカルパは「つくろい」の巨匠だと思うんですけれども、単に修復するってだけではない。中村さんにしても古谷さんにしても、みんな同じようなことを言われてるんですけれども、そこにある種的美を感じさせる。例えば猪除けの柵にしても、あれがアートの作品なんだっていう、そこがすごく重要なんだと思うんですね。単にもともとあった機能を元に戻すっていうんじゃなくて、そこにプラスをオンしていくような姿勢が重要なんだと思います。

「繕い裁つ人」という映画をご存知でしょうか、これは仕立て屋さんのおばあさんがやっていた仕事を、孫娘である主人公が引き継いでいくという話で、おばあさんが仕立てた洋服を主人公が、いくつも繕いながら日々を過ごしていきます。自問自答の日々を繰り返すうちに主人公は最後は自分も新しい洋服をつくっていかうと決意して映画は終わります。

単に繕うだけなら、題名は「繕い人」でもいいんです。でも、そこに「裁つ」を加えることで、修復していくっていう行為だけでなく意志を持って決断し、「創ろう」という意欲へとつなげていっている。ですから、「つくろう」という言葉は、修復していく、っていう意味と、何か新しいものを創造していく、っていう意味が寄せ集まったものではないかと思うんですね。そこに、今回のテーマの肝があるのかなと思っています。



江尻 伊礼さんの一番最後のスライド。何階建てなのかな?とか、何に使われてるのかな?とか、もともと何で出来ているのかな、ってすごい気になりました。バラックに見えるんですけど、斜めにラインが通ってたりしているので少しデザインされてるのかなって気もして、考えながら造られているんじゃないかと深読みしてしまいました。

古谷 スラムのことから話しをすると、バンコクにはクロントゥーイ・スラムっていうバンコク最大のスラムがあります。近くに港があって荷を梱包する下仕事をするような人たちが、住みついているんですね。そこでは梱包材の板切れのような端材がいっぱい発生する。だいたいクロントゥーイは端材の板切れみたいなもので家が出来ているんです。スラムの中には、その端材を使って家にするのがうまい人が居て、その人はそれが生業になって生活をしている。それはここだけのことかと思うと、それがそうじゃなくて、タイの北部のほうに行くと、もっと貧しい村がたくさんありますよね。そういう村々では、木の葉で屋根をつくったり、近くにある竹とかでつくったり、周りのものでつくってるわけです。



材料が違うだけでまったく仕組みは同じなんです。片一方は竹や葉っぱ、片一方は近くの港湾にある板切れです。これって糞虫かなって思うんです。糞虫は葉っぱがあれば葉っぱでつくし、なければ他のものでつくる。でもそれって、すごい技術で、必要なものをどこか遠くから取り寄せたりしないで近くにあるものでなんとかしようとする。

棲み処をつくるチカラっていうのが、ほんとは人間にもあるんだなみたいなことが思い出されるんですね。スラムはまさにそうだし、その究極的なものが最後のスライドだね。

中村 今の話し、今和次郎が関東大震災後にやってた、その辺にあるもので建物をつくるっていうことと同じようなことですよね。家というよりも巢っていう感じかな。

栗生 ありあわせのものでね、いろんな工夫して使いこなしてる。まさに野生の思考ですよね。我々が学校で学んで建築をつくっていくっていうのは全然違う。

中村さんのスライドのシェーカー教徒の衣服、ポケットにしちゃったみたいな、ああいう現場主義みたいな、その場で発想して仕上げていくよこびのような、そういうことが「繕い」って言葉は併せ持っているのかなっていう気がする。

古谷 同じことが建築でもできますよね。修復し続けていきながら時代にあわせていったり、機能を付加していくこともある。強度が不足してくれば強度を補っていくこともするかもしれない。「繕い続ける」ってことが何かをクリエイトすることに繋がっていくのではないのでしょうか。

中村 「繕い」の精神のなかには、「ものを大事にしよう」という、ものに対する愛情っていうのかな、そういうものがあると思います。

栗生 中村さんのスライドのやかんなんかね。あれなんか見ると、使い続けたいなと、これは捨てられないな、というある種、物に対する執着みたいなものがあって、使えば使うほど、またさらに愛着が増していく。建築もそうありたいですよね。

古谷 未だにやかんとして機能してるっていうのが凄いですよね。違う物に置き換わったわけじゃなくて機能がずっと続いているっていうね。



さっき、栗生さんに竹の猪垣(ししがき)のことを取り上げていただいて、本来は単なる物である猪垣がアートになってるって話がありましたけど、元来デザインされる対象っていうものは、要らないものじゃなくて、どうしても無くちゃならない必要なものだから、そこにデザインが施されたり、芸術的なモチーフになったりしたんじゃないかなって思います。ヨーロッパの組積造の窓のところっていうのは、ペディメントがあってコラムがあって窓台があって、すごい装飾的になってるでしょ。だけど、あれは最初からどうしても要るものだったんですよね。だからあっても無くてもいいようなものは、デザインの対象にはならなくて段々消えていくんだよね。取ってつけたようなものじゃないっていうこと。



中村 それと…あれですよ、人間が持つてある種の意匠心っていうのかな、それが現れるところがおもしろいんですね。シェーカーの家具なんて、合理性と機能性だけでできているようなものだけど、最終的にちょっとした飾りを造るね。それが人間の持つてある意匠心じゃないかなと思う。

栗生 スカルパの美意識っていうか、意匠心って言われましたけど、中村さんの最初スライド「繕う美学」にも同じような美意識を感じました。修復に関わる時には、そういった美意識っていうか、ある種の美学がないと、なかなかいいものができない。もともとある姿もいけれど、手を加えることによって、さらに良くしていく。それが「繕う美学」なのかなと思う。

中村 これから作品を見ていく時に、今してきたような議論があってから見だすと、見え方が違うだろうなと思います。今ここに来るまでに見ていた見え方と、ここで議論したことをベースに見ると、見え方が明らかに違う気がしますね。

古谷 京都に建てた伊礼さんの家が基点となって、隣に伝播して連鎖していくっていうのは、大変幸運なひとつの例だと思うんですけど、日頃、自分もそうしてるっていうことだけ、伊礼さん自身は具体的に言うと、どういうふうに造ってるんですか?

伊礼 緑を植えたり、建物自体を低く抑えたり、陽あたりのことに気を使ったり、近所に気を遣って設計してるというのが伝わるんだと思うんですね。周りに対する気遣いを感じられるといいかなと思います。

中村 今ひとつ思い出した。ロバート・ベンチュリーって建築家がね、海辺に別荘かなにかをつくるんですよ。その辺りって、すごく風景が乱れていて変な家ばかり建ってるんだって。それで、そこにね、きれいな建物を造ったら、さらに風景が混乱する。だからそれに合わせた建物をつくりましたって言ってましたね。

伊礼 今回の応募作品でも似たよう、「街の質量」っていう作品がありますね。ああいう感覚ってわかるような気がするんです。気配みたいなもの。中村さんの最後のスライドの改修の仕事って、まったくそうなんだと思うんですけど、周りになにかを感じ取ってもらって、それを気にしながら、その地でものづくりをするっていうのは、とても大事なことかなあと思いましたね。

古谷 中村さんの最後のスライドは、この建物が無いと成立しないデザインなんだけど、そこを、そのまましておくじゃなくて、「繕って」つくりかえようという動機があって初めて成立するもので、そこで新旧が組み合わさって成立するものだと思うんですよね。で、僕はこの感じていうのは、街でもおんなじことじゃないかと思うわけですよ。連続する軒かがあるって、それに対して一軒新築するってことは、ちょっとスケールが違うだけで、これとおんなじことをやるっていうふうには捉えるべきなんじゃないかなと思います。

そろそろ時間もいいようなので、このあたりで終わりにしようと思います。このコンクールの「〇〇の建築」っていう言い回しはひとつの形式になっていますが、それは発想の原点になってほしいというもので、我々としてはできるだけここから拡がりが見られることを希望しています。今後のみなさんの発想のきっかけになればなと思っています。

今回のシンポジウムはここまでとします。ありがとうございました。



審査員賞



中村好文賞「ケロクボの家」
伊藤裕美

古くからの農村集落に建つ古民家の改修。
外観はそのままにして集落になじませ、傷んだ部分は造り替え、環境性能を補って現代のライフスタイルに合わせている。古い材料から新しい材料へと置き換えていく、まさに“繕う”ということ。真正面からとらえた作品。



栗生明賞「黄金町の切込」
柿木佑介+廣岡周平/PERSIMMON HILLS architects

風俗店だった店舗の全面を斜めに切り込んでギャラリーに改装した作品。
同じような4部屋が並んでいる中に、違ったテイストのものを入れ込んで鮮やかに際立たせている。三角形のギャラリーが建物を繕っている感じがよく出ていると思う。



古谷誠章賞「テラスハウスの線びき」
宮本久美子

築40年のスキップフロアのあるテラスハウスをリノベーションした作品。
新旧の材料が組み合わさってパッチワークのように見え、継いで接いでして造った感じが“繕う”を感じさせる。



伊礼智賞「まちの伝言板」
田中南帆

黒板の建物を街の一角に建てて、ご近所のコミュニケーションスペースとする提案。
SNSのようなツールと違って、これはこの場所に行かないと情報が得られない。分断したコミュニティをもう一度繕っていくというような意味では、こういう考え方は有効だなと思う。



江尻憲泰賞「タケサク」
諏訪匠 竹中智美 森有結美 山田拓+名城大学柳沢研究室

歴史的街並みでの、景観に配慮したバリエーションの実作。
カラーコーンなどの既製品では景観を崩してしまうため考案されたもの。街並みに溶け込み、どこでも手に入る材料を使って、誰でも簡単に造ることができる。石を上からぶら下げて、その重みで安定させるといいところがある。

佳作



「所作からつくる“茶室”」
山本雄一

お茶をたてる時のイメージと茶室での所作を参考にして形態を構成したインスタレーション。



「3.4㎡のキセキ」
加藤丈博

家の中のトイレだけを改修した事例。トイレだけを改修したことで、そこがアクセントになっている。



「VISION GLASS JP」
立花美緒

倉庫内の在庫が減っていくとそこに空間が出来る。その空間を人が“繕う”という逆説的な発想。



「街の質量」
立池史門

相互に繕われた関係にあるもので街は構成されている。繕われた時間の長さや、ひしめき合う様に生活感が投影されて街は重みを増す。

公開審査をふりかえって

中村 「つくろう」ということに対する何か新しい提案がないかな、と思って期待して来たんですが、個人的はきちんとこのテーマに答えてくれた作品が少なかったように感じました。ですから、そういう意味では少しがっかりする部分はあるんですけども、みなさんとの話し合いの中から全然違うふうに見えてくることもあるんだな、と気づいたことが大きな収穫だったと思います。

僕が個人賞で選んだ「ケロクボの家」は、直球すぎるぐらい直球で、まともではあるんですけども、こういうことが大事なんじゃないかなあと思ってあえて選びました。

伊礼 僕は、会場に来るまでは「Butterfly Effect」を選んでなかったんですね。会場でパネルを見てよくよく読みこなすと、つくろの執念と、つくろい続ける執念が感じられ、これは、ものづくりに直結してるんじゃないかと思って票を入れました。

もうひとつ、とっても気になったのが「にじゅうさんそう」です。一人で造ったということと、現場で余った材料で造ったというところ。僕が小泉誠さんとやってる「大工の手」という活動にも通じるところがあって、とても共感が持てました。

今回のテーマ「つくろう建築」は個人的にも勉強になったなと思っています。



CONCOURS

栗生 シンポジウムの最初に言いましたけれども、やはり最後に、この「つくろう建築」というテーマが良かったなというふうに実感しています。

「みんなで作ろう」という「つくろう」と糸偏の「つくろう」は、なんとなくつながっているんだと思います。例えば「まちの伝言板」みたいなものですね。人間関係を繕っていくこと、非常にアナログなだけども、そこに行かないと立ち会えない。空間を提案しながら、そこでの人間の振る舞いを想定しながら、つなげて繕っていく、そして、それを意欲を持って実現し、継続していく。こういう割と地道なことが重要なんじゃないかなってことを思わせられました。

江尻 今回は、いつものようにぶっ飛んだ作品は無かったかなという気はしていますが、手づくり感があるものが非常に多くて、そういう意味では共感できる作品があったし、おもしろく見せていただきました。江尻賞の「タケサク」は、こだわっている部分が少し細かいんですけど、いろいろ考えて作ってるなというふうな思えたので選ばせていただきました。



古谷 途中、話しの中で「金継ぎみたいなものが、あんまり無かったですよね」って言ってしまいましたが、器でやるような金継ぎを建築でやるってことは、もう少しいろいろと考えないといけない。金継ぎのボンドになるものを挿入して継ぐってことばかりではないと思うんですね。

建築においては、もしかしたら金継ぎする金継ぎ部材は、そのあいだにある空気でつながるんじゃないかっていうふうな今日のコンクールを聞いてて思い始めました。そういう意味で「黄金町の切込」は、あそこに入れた三角形の空気のほうが金の役割を果たしている

し、「VISION GLASS JP」は、倉庫の荷物が無くなってきた時に、それがものをつなぐ空間になる。建築に金継ぎをもってくると、そういう空気の部分が重要でそれが金継ぎ部材になるということを発見したような気がします。

一方で、これはもともと思っていたんですけど、「古いもの」と「新しい」ものが組み合わせられてまったく新しいものに生まれ変わる、っていう最初に言ったスカルパの発想は依然大事なことだと思っていて、そういう意味では「テラスハウスの線引き」は、比較的真っすぐに受け止めてたなという感じがしました。でも、最優秀賞、優秀賞に並んでいるものは何か?というところ、ものをつくり出すエネルギーなんですね。「Sri Dandan」も「にじゅうさんそう」も孤軍奮闘しているような感じなんだけど、それがすごいエネルギーになって、ものの価値を生み出しているなと思いました。中でも「Butterfly Effect」は、先にプランから考えていくんじゃなくて、空間を包み込む部材を置いていきながら、仮縫いして仕立てていくっていう感覚、これは今日発見できて、とてもうれしく思っています。まさに最優秀賞にふさわしい作品です。

以上で審査会を終了したいと思います。ありがとうございました。



あとがき

「つくろう」は、作る、繕うと建築にまつわるワードを連想できるテーマでした。特に「繕う」は、シンポジウムにおいても5人の建築家がこれからの日本のあるべき一つのライフスタイルを論じてくれた気がします。物のない時代は、寄せ集めの建築や繕い続けた上着を身につけていました。後に多くの物が人々に行き渡り、繕うより買い替える。お金により解決する時代になりました。しかし、成熟した今、繕うことで面白がったり、愛でたり、さらにはプラスの価値がそこにあることを感じる時代になりました。経済的な理由だけで繕うのではなく、繕いながら使い続ける。また繕う度に新たなモノに生まれ変わるような建築と向き合いたいですね。

最後にこの企画に賛同頂いた協賛企業の皆さま、後援をお引き受けいただいた団体の皆さまに感謝いたします。いつも楽しく深い話をしてくださる5人の建築家に御礼申し上げます。

今回は節目の第10回建築コンクール「醸しだす建築」でお会いしましょう。

(公社)愛知建築士会名古屋北支部長
浅井裕雄

後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、(公社)愛知建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会、(株)中部経済新聞社、(公財)名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

協賛企業

AsahiKASEI
旭化成建材

一般財団法人
愛知県建築住宅センター

雨のみちをデザインする
株式会社 **タニタハウジングウェア**

kitchenhouse

Heim
INTERIOR SALOON

株式会社 **マツナガ**

株式会社
ユニソン

岐阜アルコ株式会社
岐阜県岐阜市(株)129-1 電話(0574)63-1018 FAX(0574)62-2417

旭化成建材株式会社、一般財団法人愛知県建築住宅センター、株式会社確認サービス、株式会社CI東海、株式会社タニタハウジングウェア、株式会社TJMデザインキッチンハウス名古屋店、株式会社ハイム、株式会社マツナガ、ユダ木工株式会社、株式会社ユニソン、株式会社ワセ田ガス、岐阜アルコ株式会社、株式会社総合資格名古屋支店

